
aristocracy

久世はるや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

a r i s t o c r a c y

【Nコード】

N 3 9 0 0 P

【作者名】

久世はるや

【あらすじ】

下町に暮らす少年、貴族に拾われる。

命令

「そこのお前。僕についてきたまえ」

その言葉は、あまりにも唐突で、高飛車で、そしてとても自然だった。

1. 申し出という名の命令

今日も下町は喧騒に溢れている。

商人のよく通る声、女たちの賑やかなお喋り、子どもたちのはしゃぐ声。それらが一体となって、渦のように町の上空を泳ぐ。活気がそのまま音となって放出されているような、そんな陽気な喧しさだった。

その中を、セスは走っていた。

胸に抱えているのは届け物の包み。親のいないセスに定職はなく、使い走りのような仕事をして日銭を稼いでいるのだった。今日もこの荷物がある工房から客の家へ届けることで、夕刻に食べるパンの分を稼ぐのである。

その途中、顔見知りの商人と立ち話をしているところへ、

「僕についてきたまえ」

そう、声をかけられたのだった。

セスは肩越しに振り返った格好のまま、随分と気位の高い言葉を寄越してきた相手を咄然として見つめた。

仕立ての良い服を着ている。セスのような貧しい庶民には一生縁のなさそうな代物だ。白い、ふんだんにフリルがあしらわれたシャツ。紺色の上着には金の刺繍。ブーツは滑らかな濃茶の牛革である。派手すぎて滑稽にもなりかねない豪華なそれらを、彼は何の嫌味もなく完全に着こなしていた。おまけに白金色のさりとした髪に縁取られた卵型の顔はたいそう整っていて、その青灰の瞳に射とめられれば女は誰しも頬を染めるであろうというものである。

セスがぼかんと口を開けたまましていると、彼は不機嫌そうに眉間に縦皺を刻んだ。

「なんだ、その顔は。きたまえと言っているだろう」

「……は、その、ですが、貴方は」

「僕か？ 僕はキーファー・ケンドリック・コール・クラインだ。人に名を訊くならまず自分から名乗るのが礼儀ではないのか？」

「あ……は、はい、僕は、セス・ソローと」

「ふん、セスか。呼びやすい名だ。ではセス、早く」

言うが早いか、キーファーと名乗った青年はどんどん歩いていてしまう。

変人だと放っておくことは簡単だったが、そうするにはセスはあまりに人が好すぎた。訝しげに眉をひそめる商人に別れのあいさつをして、小走りにキーファーに追いつがる。

「あの、お待ちください」

「まだ何か訊きたいことが？ クラインと聞けば大体僕の立場は解るだろう」

「ええ、それはそうですが、どうして僕をお呼びになるのですか？

貴方のような貴族様が、僕のような庶民を」

「貴族だからに決まっているだろう」

きっぱりと答え、キーファーは苛立ったように腕を組んだ。そしてさらに、「その包みならば誰にぞでも預けてしまえ」などと恐ろしく勝手なことを言う。

確かにクラインというのはこの国屈指の上流貴族の苗字であり、キーファーはそこに名を連ねていても全くおかしくない風格を持っていた。そのような者が何故こんな下町に単身来ているのか、そして突然セスのような庶民中の庶民に話しかけたのか――それもついでこいなどと――全く謎である。

キーファーは歩みを止めないまま、早口に言った。

「簡単な話だ。僕には今身の世話をする小間使いが必要で、しかし父上が用意するようになつまらん人間や、ましてや小うるさいメイドなど欲しくはない。それならばいっそ身分など関係なく、僕が自分で見つかった人間を小間使いにしようと思ったただけだ」

「はあ……それで、どうして僕なのです？」

「それは、お前がいかに身寄りがなさそうで、僕とだいたい年頃が同じに見えて、そこそこの器量がよく、偶然僕の目にとまったからだ」

「……僕には養わなければならない老いた母と、まだ幼い弟妹が5人ほどこいなのですが」

無論、嘘である。

なるべく哀れっぽく聞こえるように声を震わせたセスだったが、キーファーの「嘘をつけ」という一言で一蹴された。

「僕を舐めるな。伊達に十七年も生きていない。人を見る目にはいささか自身があるつもりだが？」

冷やかな視線を流され、セスは言葉を吞み込む。勝てない、と悟った。

そして。

「……それでは、この荷を届けてしまうだけの時間をいただいてもよろしいでしょうか？」

セスは腹を決めた。

キーファーはきつくしていた目付きをわずかに和らげ、唇の端を吊り上げて笑った。

「わかった。それならば、今日の日没頃、もう一度この場所に来よう」

それからキーファーは少し考えるような素振りを見せて、おもむろに左手首のカフスボタンを外しセスに差し出した。

「僕は君を見込んでこれを渡すんだ。……僕を裏切らないでくれるな？」

「……はい」

「どうしても僕に仕えたくない、というだけの理由ができたなら、仕様がなない。どこへなりとそれを売りたまえ。片方とはいえ上等なサファイアだ、それなりの値にはなるだろう」

どうやら人の返事はまるで聞かない質らしい。キーファーはセスが頷くのにもくれず、踵を返し人混みの中へ消えて――否、消えることはなかった。キーファーのいかにも下町らしくない装いが人目を引き、海を割る聖者よろしく道をつくることとなったからである。

セスはその背中と手の中のカフスボタンを交互に見比べ、ややあつてから荷物を抱え直して走り出した。

そして、町が橙色に染まり、夕食の匂いがたちこめ始める頃。

セスが今度は何も持たず、身一つで昼間にキーファーと別れた場所へ赴くと、

「――来たな、セス」

満足げな笑顔を浮かべた青年貴族が、腕を組んで立っていた。

「やはり僕の目は正しかった。さあ、カフスボタンを返したまえ」

「はい、……その」

「キーファー様、と呼べ」

「はい、キーファー様」

シャツの胸ポケットからその高級品をそつと取り出し、キーファーの白い手に乗せる。

彼はそれを元あったところにつけ直すと、セスに明るく言った。

「これから色々と準備がある。覚悟したまえよ」

「かしこまりました」

セスは精一杯気取ってそう言い、恭しく礼をして見せた。

c o n t d .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3900p/>

aristocracy

2010年12月8日23時55分発行